

聖書：コリント人への手紙第一 12：12～26

説教題：各部分が互いのために

日時：2022年11月13日（朝拝）

コリント教会の礼拝と関連して生じていた諸問題の3つ目、御霊の賜物についての話を2週間前から見えています。これまで見て来ましたように、コリント人の間では異言の賜物がもてはやされていたようです。異言とは人々の理解できない言葉で神に向かって話したり、祈ったり、賛美するものでした。周りの人々が理解するためには解き明かしを必要としました。そのような特殊な御霊の現れに人々の関心は当然引き付けられます。そして異言を話せる人こそ霊的な人、神の祝福が豊かにある人であると人々は見なします。また自分もそれが話せるようになりたいと願います。しかしそれができない人はやがて落胆し、劣等感を覚えます。一方、異言を話せる人は自分は霊的な人であると高ぶり、そうでない人を見下す。そういう状況があったようです。そんなコリント人たちにパウロは12章1～3節で、イエスを主と告白した人はすべて聖霊によったという大切な真理について述べました。聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできませんと。ですからイエスを主と告白したクリスチャンは全員、聖霊を受けた人、御霊の人です。異言を話せる人だけが御霊の人ではありません。また4～9節では同じ一つの御霊が、御心のままに、それぞれに賜物を分配しておられることが語られました。賜物という言葉はギリシャ語でカリスマという言葉で、今日もカリスマ美容師とかカリスマ主婦などと使われたりします。特別な能力や技術を持っている人のことです。このカリスマという言葉はギリシャ語のカリス、すなわち恵みという言葉に由来します。ですからそれを持っている人は誇るべきではありません。またそれは7節で「皆の益となるように」与えられたと言われました。ですからそれを持っている人は、それで誇るのではなく、人々のためにそれを正しく用いる責任を自覚しなければならないということになります。

今日の12節以降でパウロはからだの類比を持って賜物のことを説明します。からだは一つでも、そこには多くの部分があります。頭、首、肩、胸、腹、背、腕、手、指、腰、もも、すね、足の指、等々多数です。そのように多種多様な部分があるのに一つのからだです。多様性と統一性が同時に成り立っています。12節最後に「キリストもそれと同様です」とあります。一見どうということかと思いますが、これは教会のことです。パウロは以前、教会を迫害していました。その彼はダマスコ途上で復活の

主にお会いした時、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と主から言われました。イエス様はそのようにご自分と教会を一つのものとして結び付けておられました。この後、27節で教会を指して「あなたがたはキリストのからだである」と言われます。ですからこの12節で「キリストもそれと同様です」と語った際、パウロの頭にあったのはキリストのからだなる教会のことでした。

教会ではなぜ多様性と一体性が共存するのか、その根拠が13節です。教会を構成する人々は色々です。ユダヤ人もいればギリシア人もいます。奴隷もいれば自由人もいます。人種や階級の異なる人たちがそこにいますし、生まれ育った環境や受けた教育も色々です。しかしそういう私たちはみな「一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました」とあります。聖霊は「イエスは主である」との告白へ私たちを導く霊であり、コリントのクリスチャンたちもみな、そのように告白しました。ですから彼らは同じ一つの御霊によってバプテスマを受け、主に結ばれた者たちです。一つの御霊に導かれて一つとされた者たちです。13節後半に「そして、みな一つの御霊を飲んだのです」とも言われています。ある人々は13節の前半は洗礼について語り、後半の「飲む」と言われている方は聖餐式を指すと考えますが、そうではないと思います。ここの「一つの御霊を飲んだ」という表現は過去の決定的な出来事を指す時制で書かれています。もし聖餐式を指すなら、繰り返し現在も行われていることを指す時制で記されるはずですが、しかしそうになっていません。むしろこれは彼らが御霊によってキリストへの信仰へと導かれ、今や御霊の豊かな祝福にあずかる者となったことを指す表現と思われる。「みな」と言われていますように、この御霊の豊かな祝福にあずかるのはごく一部の人だけではありません。イエスを主と告白する信者はみな御霊を飲む者とされました。教会の一致はこのように人間が作り出したものではなく、聖霊が生み出してくださっているものです。私たちは同じ御霊を受け、本質的な一致をすでに与えられている者たちとしてこの信仰生活を歩んでいます。

このように多様であり一つである教会について、パウロは14節以降で、両方の方向から大切なメッセージを語ります。前半の14～19節のポイントは最初の14節に示されています。それは「からだは一つの部分からではなく、多くの部分から成っている」ということです。つまり多様性がまず強調されます。さて15～16節の言葉は誰の言葉でしょうか。15節では足が手と比べて「私は手ではないから、云々」と述べています。16節では耳が目と比べて「私は目ではないから、云々」と述べています。こ

れはより勝ると考える賜物を持っている人と自分とを比べて自己卑下する人、あるいは誇る人たちの前で自分は大した賜物を持っていないと落胆しがちな人の言葉と考えられます。その人々はこう考えがちです。私は手のように立派な働きができないから、からだに属していても意味がない。あるいは目のように優れた働きができないから、同じからだに属しているのは申し訳ない。そんな彼らにパウロは、そう言ったところで、「それで、からだに属さなくなるわけではない」と言います。

17 節以降はほとんど説明は不要かと思います。もし体全体が目だったらどうでしょうか。目ばかりが集まった存在は気持ち悪いものです。その場合、それはどこで聞くのでしょうか。同じくもし体が耳だけからなっていたら、どこで匂いを嗅ぐのでしょうか。言いたいことはからだの中には色々な部分があって良い、いやあるべきであるということ。ですから人と違って良いのです。みな同じである必要はありません。18 節に「神はみこころにしたがって、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました」とあります。それぞれが違うのは神の御心によります。神がそのようにされたのです。からだに色々な部分があるように、神はそれぞれ違った特徴と役割をそれぞれのメンバーに与えておられます。19 節にある通り、「もし全体がただ一つの部分だとしたら、からだはどこにあるのでしょうか」。目だけであるなら、それはからだになりません。色々な部分があってこそ、それはからだとなります。

20 節以降の後半部は今度は反対の方向から述べたものです。そのポイントは最初の 20 節に示されています。すなわち「部分は多くあり、からだは一つ」であるということです。つまり今度は一体性が強調されます。21 節は誰の言葉でしょうか。これは明らかに自分を誇る人たちの言葉です。目が、私の方が素晴らしいと誇り、手に向かって、あなたなんかいないと言う。あるいは頭が足と比べて自分を誇り、足に向かって、あなたがたがいなくても私はやって行けると見下す。しかしそう言うことはできないとあります。目が手にあなたはいないと言っても、実際に手がなくなったら目は困るわけです。目薬を差すことができなくなりますし、目の色々なケアをしてもらうことができなくなります。頭が足に向かってあなたがたはいらないと言っても、本当に足がなくなったら、頭は自分が考えた通りからだを動かすことができなくなります。このように見下した部分、他より弱く見える部分が実はなくてはならないものです。ですから体のどの部分も決して見下してはいけないということになります。なくて良い部分、要らない部分はないのです。教会の中でも、たとえ他より弱く見える

部分に相当する人がいても、だからと言っていなくていいという人は一人もいません。かえってそのような人こそなくてはならない人です。

23 節は解釈が難しい部分です。「からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分」とは具体的にどこのことでしょうか。パウロはその部分について「見栄えをよくするものでおおいます」と言います。私たちのからだの中で覆っている部分はどこでしょうか。腹とか背とか腰とかでしょうか。確かに顔は外に出していますが、今述べたような部分は衣服等で覆っています。いわば隠しています。いや自分はその部分が誇らしいから是非みんなに見てほしいと思う人は、お腹など出しているかもしれません。しかしそうでない人は、そういう部分は公の目にさらさないようにしています。そのままよりも見栄えを良くするもので覆っています。さらに 23 節の最後には「見苦しい部分」という言葉が出て来ます。これはどこのことでしょうか。多くの注解者は、これは生殖器か排泄する器官を指す婉曲的表現だと言います。確かに私たちはそういう部分を覆っています。そのままさらすことをしていません。もしそのような部分を見下して自分から切り離して考えるなら、そんな部分など放置すれば良いのに、私たちはそうしません。むしろそういう部分に心を用いて覆うようにします。ある意味で他のどの部分よりも慎重にカバーを重ね、特別に保護します。なぜそうするのかと言えば、結局そこもからだにとって大切な部分、なくてはならない大切な部分だからです。ですから見捨てることはせず大事にするのです。少しでも良い格好になるようにと余計に心を用いるのです。

24 節に「格好の良い部分はその必要がありません」とあります。これは例えば顔のことを考えることができます。顔に多少メイクなどをして飾ることはあっても、結局外に出しています。覆っていません。ですからやっぱりそこは格好の良い部分なのです。つまりパウロが言いたいことは、私たちは弱く見える部分、劣っていると思う部分を実は配慮して大事にしているということです。そして実にこれは神がそのように仕組みられたことなのだと言われます。24 節後半～25 節:「神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わされました。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。」 私たちのからだには色々な部分があります。見栄えの良いとそうでない部分とがあります。格好の良い部分とそうでない部分とがあります。それらがいわばブレンドされています。ミックスされています。組み合わせられています。神がそうされたのです。それは

からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために同じように配慮するためです。それぞれがバラバラに歩むのではなく、強いところは弱く見える部分、劣ると思う部分、しかし実際には体に欠かせない大切な部分を大事に考えて気を配り、互いに支え合い、助け合い、一つのからだとして生きるためです。教会も同じです。表面的に目立ち、良く目につき、注目される部分が、そうではない部分・人々を見下し、あなたなんかいないと言ってはダメなのです。私たちの間に色々な違いがあるようにされたのは神です。それは私たちがその違いによって一層お互いを配慮し、お互いを尊び、一つのからだとしてともに歩む祝福に生かされるためです。

最後の 26 節に「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです」とあります。これは日々私たちが経験しているところだと思います。たとえば足の小指をどこかにぶつけるとどうでしょうか。私たちは決して「それは足の小指の問題であって他の部分には関係がない」という態度を取りません。むしろぶつめた瞬間、口から悲鳴の声が上がり、顔全体はゆがみ、からだは動きをストップしてかがみ、両手はぶつめた部分をしばらくの間、さすって慰めます。からだ全体が傷んだ部分を我が事として考え、ともに苦しみます。逆に一つの部分が尊ばれば、たとえば髪型が褒められたり、あるいは手のわざがほめられると全身がともに喜びます。教会はこのようなからだにたとえられるものであるとされているのです。

今日の箇所から私たちは神が導き入れてくださった救いの歩みは個人主義的なものではないことを改めて覚えさせられます。むしろ聖書が語るクリスチャン生活は共同体としての歩みです。私たちはみな一つの御霊を飲んだ者たちとして、一つのからだに属する者たちとしての歩みを導かれています。このみことばの光の下で自分の信仰生活を改めて考え直してみる必要があると思います。心に留めたいことは2つです。一つはみな違って良いということです。他の人と同じでなくて良いのです。からだには色々な部分があります。そしてその全部が必要です。ですから私たちは自分を誰かと比べて、私なんか・・・と言うべきではないのです。私には私に、聖霊は特有の賜物を与えてくださっており、その特性をもって全体の益に貢献するようにと召されています。願わくはその自分の賜物を見出して、神が与えてくださった使命と働きを果たすことができることを祈り求めたいと思います。そこに神が意図された一つからだでありつつ豊かなハーモニーを奏でる教会の歩みが導かれて行きます。

もう一つは、教会は私たちの実際のからだがそうであるように、弱く見える部分、見栄えが劣っている部分を特に心にかけて大事にすべきであるということです。良く目立つ部分、人々に注目されている部分ばかりを見て、そうでない人たちを見下すようなことがあってはなりません。むしろ一目目立たない人、地味な人、あまり評価されていないような人々を、からだにとってなくてはならない大切な方々として尊ぶのが教会です。私たちのからだはそうしているように互いに助け合い、特に他より劣っているように思われている部分、あまり目を留められていない部分を尊んで一緒に生きるのが教会であるということです。このからだの類比に私たちの教会の歩みが導かれますように。そして神が備えてくださったキリストのからだなる教会の祝福にいよいよ豊かに生きる者たちとされて行きたいと思います。